〔博士論文概要〕

（　近代における弓道の形成に関する歴史的研究　）

令和２年度

五賀友継

筑波大学大学院人間総合科学研究科体育科学専攻

本研究は，歴史学の研究法を用いて，弓道と言う新たな日本文化が，どのようにして近代において形成されたのかを明らかにすることを研究の目的とした。研究にあたっては、日本固有の身体文化として生成し，現在まで発展した弓道が，近代においてどのように形成されたのかという歴史的関心に基づき、「武道としての弓道の形成」,「スポーツとしての弓道の形成」,「学校教育としての弓道の形成」という３つの観点を設定した。そして，これら３つの観点から明らかとなった諸事実の通時的な連関を総合的に考察し，弓道が複合された一つの文化の総体であると考えて研究を行った。

江戸幕府において、弓術が制度上完全に廃止された文久２（1862）年から、敗戦により，武道の在り方や性格に大きな変化が生じることとなった昭和 20（1945）年までを，弓道史における近代と捉え、観点ごとに対象となる時期区分を設定した。

論文の構成は、次の通りである。

第１章では、「武道としての弓道の形成」について、武道の歴史的形成の中で，弓道はどのようにして形成されたのか、弓術から弓道への変化を武道概念との連関において考察し，弓道がどのようにして武道となったのかを明らかにした。第１節では、近世弓術の廃止と、弓術継承の試みについて明らかにした。第 2 節では、大日本武徳会による武道概念の形成と、武徳会における「弓術」から「弓道」への名称変更及び、名称の変更に伴う理念及び実態への影響について明らかにした。第３節では、大日本弓術会の成立・展開と大日本弓道会への改称に伴う弓道概念の創出について明らかにした。第 4 節では、「弓術」から「弓道」への用語使用の変化について明らかにした。第 5 節では、弓道形の統一を巡る混乱と対立について明らかにした。

第２章では、「スポーツとしての弓道の形成」について、近代において，日本でスポーツが伝来・受容されて興隆を見せる中で，弓道はどのような影響をスポーツから受けたのかを，弓道固有のルールが整備され，そのルールが全国的に広く普及し，組織化，制度化されていく様相を明らかにすることで検討した。また，当時の弓道家らが，どのような点を以てスポーツと認識し，弓道はスポーツとして行われるようになったのかについても考察することで，弓道独自のスポーツ化の様相について明らかにした。第１節では、近代において、組織

的な弓術競技大会が発生していく様相について明らかにした。第 2 節では、明治神宮競技大会における弓道競技について検討を行った。第 3 節では、学生弓道における組織化の進展と全国統括団体の設立について明らかにした。第 4 節では、近代において新たに考案された、採点制という弓道競技方法について考察を行った。

第 3 章では、「学校教育としての弓道の形成」について、明治維新以降の近代学校教育において，弓道はどのようにして行われるようになったのか、弓道の学校教育における位置付け及びその教育的価値について考察し，学校教育に導入されたことによる弓道文化への影響について明らかにした。第 1 節では、近代学校教育制度における武術の正課採用と弓術の対応について明らかにした。第 2 節では、課外における弓術部の発足と弓道部への改称について明らかにした。第 3 節では、学校体育における弓道の正課導入について明らかにした。第 4 節では、正課弓道の実態について明らかにした。第 5 節では、戦時体制下の体錬科武道における弓道について検討した。

結章では、本研究の結果を次のように総括した。幕末から明治維新前後の時期に，弓術は近代兵器の導入に伴い、順次幕府及び諸藩の制度から廃止されていった。明治維新後は、矢場営業の流行によって弓術に対して遊興の具や低俗化したといったイメージが与えられ、大きく衰退した。こうした状況の中で，旧幕時代に弓術指南役などを務めていた者らが弓術の道場を開所し，弓術指南などを行うようになったのは明治 12 (1879) 年頃からであった。当時の弓術家は，弓術を運動や遊戯として行い，健康や衛生を目的とする体育的な価値を主張することで弓術の再興を図った。弓術を剣術・柔術と同様の武術として主張する者は少数であった。弓術は、実用性を喪失しており、教育的価値の理論化も明治期に図られなかったことから、警察や学校において採用されることは無かった。

明治 28 (1895) 年に設立された大日本武徳会において，弓術は保存すべき古武芸とされ，武術種目の中で低位に位置づけられた。武徳会では、軍事的な実用性を有する武術種目を優先的に取り上げていた。そのため、弓術は，剣術・柔術と比較して、各種制度・規定において明確な差異が設けられていた。

武徳会が弓術を古武芸として扱い消極的な対応を取っている間，弓術界では 2 つの特徴的な動きがあった。

1 つ目は，学校の課外において学生スポーツの 1 つとして弓術が行われるようになり，弓術のスポーツ化が進められたことである。明治 20（1887）年頃から各学校において弓術部が設置され，後に多くは弓道部へと改称し，弓道競技を中心とする学生弓道が発展・展開した。学生弓道は組織的な拡大を遂げ，昭和 5（1930）年には、全国の学生弓道を統括する組織である日本学生弓道連盟が設立された。

「スポーツとしての弓道の形成」を考える上で、画期として見出せるのは、大正 14(1925) 年の第 2 回明治神宮競技大会において、「弓道部規定」が制定され、弓道競技規則が制定されたことである。一方で、近代において、全国的な弓道統括団体の下で、弓道競技規則が制定され、選手権大会が開催されたと考えられるのは、日本学生弓道連盟によって、昭和 6

（1931）年に開始された日本学生弓道選手権大会である。近代において、弓道のスポーツ化に大な役割を果たしたのは、学生弓道であった。

2 つ目は，弓術の体育的な価値をより積極的に主張するものが現れたことである。その代表的な存在として、明治 42（1909）年に根矢鹿兒によって設立された大日本弓術会が挙げられる。大日本弓術会では根矢の弓術の健康への効果を意識した弓術観が反映され，弓術を行うことによって胸郭を中心とする上半身の鍛練となり，結核予防への効果が主張されていた。

大正 8（1919）年は，弓道の形成を考える上では画期となる年である。この年，武徳会と大日本弓術会の双方が、「弓術」を「弓道」とした。しかし、両団体の弓道概念は異なるものであった。

武徳会では、術は技術に偏重したもので，道は精神を鍛える高尚なものであるとして，術と道を差異化して術から道への転換が行われた。武徳会では心身の練磨という目的を強調するために「武術」を「武道」としたが，その結果これまで重要視されてきた軍事的な実用性に基づく種目の序列が改められ，弓道は剣道・柔道と同等の武道として扱われるようになった。名称の上では，大正 8（1919）年に武徳会において武道としての弓道は形成されたと言える。しかし，武徳会の弓道は上位に位置する武術が武道となったことで形成されたのであって，弓術界内部から発生したものではなかった。そのため，実態に変化が現れるためには更なる時間を要した。大正 10（1921）年頃から，剣道・柔道と同等の扱いとすべく各種規定・制度などが整備されていった。そして，昭和 3（1928）年に新たな本部弓道場が落成した際に，当時の武徳会会長・本郷房太郎から「心身鍛錬を一義とする」弓道を再評価する演説がなされたことで，弓道は武道であることが明確に発信され，武徳会における「武道としての弓道」は形成されたと言える。

一方で，大日本弓道会では弓術は弓道の一部であり，弓術は弓道に内包されると考えられた。弓術は修練すべき弓道の 1 科目であり，技術すなわち弓術の重要性は弓道となっても繰り返し説かれていた。当然，弓術の体育的価値を主張していた大日本弓道会にとって，技術は科学的研究による理論に基づくものでなければならず，それらの理論を弓道に含めていた。また，大日本弓道会の弓道では，精神的な側面を敬神思想との繋がりで捉えていた。

それぞれの弓道を、さらに詳細に見ていけば、弓道において心身の練磨をどのように行うのかによって，弓道家間で考えの相違が見られた。大別すれば，「心」の側面から精神的な視野を極力開拓して行こうとする弓道家と，「身」の側面から技術の修練を通して心的の修練すなわち精神方面へ向かおうとする弓道家が存在していた。いずれも、細かく見ればさらに複数の流れを見ることができる。前者については，具体的な精神の内容を何との繋がりにおいて考えるか、後者については技術の裏付けを、何を以て行うのかである。技術の場合、近世弓術流派で培われてきた実戦的な射法に求めるのか，あるいは近代科学の理論を以て、新たな射法を構築しようとするのかが異なっていた。

精神派の弓道家について言えば，「武道としての弓道」が形成されたことで、一定の地位

を獲得したと言える。その代表格として、阿波研造が挙げられる。武徳会で、大正 11（1922）年に弓道で階級制度が導入された際に，阿波は射形の良し悪しを的中すなわち技術によって判断することを否定し，「武道としての弓道」における精神面の重要性を説いた。阿波の影響の下で、大正 11（1922）年に東北帝国大学学友会弓道部の主催で開始された全国高専弓道大会では，採点制という新たな弓道競技方法が採用された。これは、的中を評価基準とせず、弓道の精神を評価しようとする、新たな弓道競技の方法であった。

武道に精神性を強調する武道家の中には，武道とスポーツの差を意識し，スポーツ種目と同様に競技を行うことを否定する者もいた。しかし，弓道において、精神性を強調する弓道家は，競技そのものを否定することはなかった。その競技方法を変更することで，弓道競技において武道の精神性を評価する方法が考えられたのである。

その具体的な意味内容は異なるが，「弓術」の代わりに「弓道」という用語が各所において定常的に用いられるようになったのは、大正 9（1920）年以降であった。その後，徐々に用語使用が変化していき，昭和 8（1933）年には「弓道」という用語が一般化した。

昭和 8（1933）年に弓道形の統一に関する議論が生じるまでは，それぞれの「弓道」は一定のバランスを保って共存していたのではないかと考えられる。弓道形調査委員会に任命された武徳会弓道範士・教士を見てみれば，精神及び技術のそれぞれに比重を置く弓道家がいた。武徳会とは異なる「弓道」を行っていた代表格である大日本弓道会は，自身の領域を有して活動を行っていた。「スポーツとしての弓道」を行う学生弓道も，「武道としての弓道」を行う弓道家から表立って批判されているようなことはなく，むしろ肯定的に捉えられていることが多かった。そもそも，その形成時期からして、「スポーツとしての弓道」の方が、「武道としての弓道」より先行しており，例えば学生弓道の方が、近世弓術との繋がりを見出せる点が多く存在していた。そのため，「スポーツとしての弓道」を行う学生弓道を批判することは，結果的に近世弓術との繋がりすなわち弓術の伝統を否定することにも繋がりかねない問題であったと考えられる。

こうして，近代となって以来，様々な流れの「弓道」が，それぞれの領域で展開しながら発展してきたものが，昭和 8（1933）年に武徳会が弓道形の統一に乗り出したことで大きく混乱することとなった。武徳会は、学校教育における弓道の正課編入を見据えて、弓道の統一形を制定しようとした。昭和 9（1934）年に、武徳会による弓道統一形である弓道要則が発表された。しかし、統一ありきで議論が進められた結果，歴史的・技術的背景を何ら有さない折衷案となり、特に射法における打起し方法に批判が集中し、武徳会は後に弓道要則を実質的に解消した。

弓道形の統一に関する議論から見えてくるのは，本質的に近代社会において弓道の価値を何に見出し，どのような意義や目的を以て実施するのかについては未確定であったことである。すなわち，近代において弓道に対する統一的・支配的な概念が確立することはなく，近代において形成された弓道は，その大小はあるものの，並列して複数の弓道概念が存在していた。それぞれの「弓道」は，各自の領域において一定の支持を得ながら展開しており，

弓道形は、それぞれが有する弓道概念を実現するための手段であった。そのため，弓道形を統一することは，その弓道形によって発揮される「弓道」以外を否定することに繋がった。さらに，これまで行われてきたいずれかの弓道形を採用するわけではなく，全く新しい弓道形を創り出したことによって，弓道が主張する伝統をも否定することとなった。

弓道形を統一しようとした背景には、弓道を学校教育の正課として導入しようとする動きがあった。昭和 11（1936）年に、弓道は中等学校の正課として導入されたことで、「学校教育としての弓道」は、一定の形成を見た。学校正課における弓道の意義としては，精神修養と肉体の練磨が第一に挙げられていた。また，弓道の特性として、「心身の気力一致を自覚すること」が主張されていた。

しかし，武徳会の消極的な姿勢や、弓道形の統一が混乱したことに加えて，集団指導法の構築，指導者の資格及び養成，弓道教授要目の制定，施設・用具の確保，運動量の確保といった現場レベルでの問題解決がなされずにいた。そうするうちに，昭和 16（1941）年に太平洋戦争が開戦し，戦争の影響が学校教育へ及ぶようになると、武道の戦技化が図られるようになった。再び、軍事的な実用性による種目の序列が武道において出現し，弓道は学校教育において重要視されなくなった。戦時体制下において，弓道は学校教育で実施された武道の中で、最も低位に置かれた。

これまで，武道は戦時中に当時の国粋主義や軍国主義の方向へと強く引き寄せられて，重視されるようになったとされてきた。しかし，戦争がはじまり武道が戦争への繋がりを深めると，弓道はむしろ除外される方向へと進んだ。

弓道を規定する様々な行動様式は、近代において形成された。一方で、近代において形成された弓道とは，1 つの確立された「弓道」が存在するわけではなかった。それぞれの「弓道」が，多面的な方向へと展開しながら独自の発展を遂げ，お互いに影響を及ぼしあいながら，社会情勢等の影響によって変化する武道、スポーツ、学校教育の下で、複合的且つ融合し合いながら形成された。